

氏名 金持 亜実
 ヨミガナ カナジ アミ
 学位の種類 博士（音楽）
 学位記番号 博音第261号
 学位授与年月日 平成27年3月25日
 学位論文等題目 〈論文〉 ファニー・メンデルスゾーンとクララ・シューマンのリート作品における歌唱表現の提案
 〈演奏〉 Fanny Mendelssohn :
 Szene aus “Faust II” Sopran und Klavier mit SSAA Soli und SSAA Chor
 5 Liender Op.10
 1. Nach Süden
 2. Vorwurf
 3. Abendbild
 4. Im Herbst
 5. Bergeslust
 Alma Mahler :
 5 Lieder
 1. Die stille Stadt
 2. In meines Vaters Garten
 3. Laue Sommernacht
 4. Bei dir ist es traut
 5. Ich wandle unter Blumen
 Clara Schumann :
 6 Lieder aus “Jucunde” Op.23
 1. Was weinst du, Blümlein
 2. An einem lichten Morgen
 3. Geheimes Flüstern
 4. Auf einem grünen Hügel
 5. Das ist ein Tag, der klingen mag
 6. O Lust, o Lust
 Der Mond kommt still gegangen
 Die stille Lotosblume
 Ich stand in dunklen Träumen

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科）	平松 英子
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科）	檜山 哲彦
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科）	佐々木 典子
（副査）	東京藝術大学	准教授	（音楽研究科）	菅 英三子

（論文内容の要旨）

本論文の目的は、19世紀前半に活動した女性作曲家のうち、いわば「アマチュア」の音楽家として活動したファニー・メンデルスゾーンと「プロ」の音楽家として活動したクララ・シューマンのリート作品に

ついて、彼女らのリート作品に対する意図やこだわりを読み解き、現代に通じる歌唱表現を探求することである。

この二人の女性作曲家は、当時の社会背景の理由からそれぞれの「葛藤」を抱きながら作曲活動を行っていた。ファニーは、弟のフェーリクスをも凌ぐほどの優れた才能を持ちながら、当時の社会背景による両親や弟の反対からプロとしての活動はできず、演奏の場は私的な演奏会に限られていた。作品の出版などはもってのほかであった。クララは、自作曲が公開演奏会で演奏される機会には恵まれており、作品の出版も容易にされ、作曲活動にも喜びを見出していたが、一方で自身の作品に自信を持っているわけではなかった。最も身近にいたロベルトという存在、またプロとして国内外問わず演奏旅行に出かけ、多くの作曲家の作品や演奏に触れる機会が多かったことが、自分の作品に欠けているものを強く感じる要因になった。また、家事との両立などにより、自分の音楽に割ける時間も極めて限られていた。

このような、当時の時代背景や音楽環境により彼女らが抱いた葛藤は、彼女らの作品に影響を及ぼしたと考えられる。つまり、アマチュアとプロ、それぞれの葛藤を作品から読み解くことで、作品の本質に迫る演奏が可能となると考えた。

そこで、第1章において、ファニー・メンデルスゾーンのアマチュアとしての音楽活動とリート作品について、第2章において、クララ・シューマンのプロとしての音楽活動とリート作品について述べ、それぞれがアマチュア、あるいはプロとして、どのような葛藤を抱いていたのか、そしてどのようなリート作品を作曲したのかを明らかにした。

つづく第3章では、ファニーとクララ、それぞれの作品に見られる特色、そして葛藤がどのように作品に表れているかを楽曲分析から明らかにした上で、それらをどのように歌唱表現することで現代に通じる演奏に繋げることができるか、その一つの案を提示した。分析対象とした作品は、両作曲家の音楽的に最も充実した時期の作品である。ファニーの《6つの歌曲 作品10》より〈夕べの情景〉、〈秋に〉、〈山の喜び〉、クララの《ヘルマン・ロレットの『ユクンデ』からの6つの歌曲 作品23》について分析を行った。二人の充実期の作品にこそ、それぞれの意図やこだわりが見事に結実しているのではないかと考えたからである。

分析は、「ことばと旋律」、「テンポ」、「ブレス」、「強弱」の4つの視点から行った。これらの視点は、筆者のこれまでの演奏体験から、詩を歌唱によって表現するための重要な手段となると考え、設定したものである。「ことばと旋律」では、詩の内容や一つ一つの言葉に対する付曲の仕方の傾向を分析した。「テンポ」、「ブレス」、「強弱」では、詩の内容を忠実に歌唱表現するために、どのようにそれらを生かすことが考えられるかを、いくつかの録音を参考にしながら検証した。

以上の分析の結果、二人の作品からは、彼女らがこだわりを持って選択した詩が、その韻律や内容に則した付曲によって表現されていること、また、ピアノパートにおいても、単なる伴奏にとどまらず、歌唱パートと共に詩の世界を表現していること、それゆえ歌唱パート、ピアノパートともに高い技術が求められていることが読み取れた。ピアノパートには、彼女らの優れたピアノの才能も表れている。これらこそが、彼女らの作品に込められた意図、こだわりであり、彼女らが抱いていた心の葛藤が、このように作品に結実していることが分かった。つまり、ファニーは、演奏機会や聴衆が限られていたにも拘らず、また、クララは、自らの作品に自信を持てなかったにも拘らず、作品上に自身を表現したのである。

ファニーとクララは、現代とは異なる時代背景、そして音楽環境ゆえの心の葛藤をそれぞれに抱きながらも、強い意志、そして音楽への深い愛情を持ち、懸命に作曲を続け、音楽上で自身を表現した。彼女らの作品からは、その芯の強さや、音楽に対する情熱を持ち続けた逞しさをも読み取ることができた。

彼女らの作品は、書かれた楽譜の通りに歌うだけでは十分に作品の世界を表現し切れない。現代における私たちは、彼女らが抱いた心の葛藤から作品を読み解き、譜面上には書かれていない、楽曲に内在する秘められた熱い思いを汲み取って歌唱表現することで、さらに彼女らの作品を読み深めていきたいと思う。

(総合審査結果の要旨)

本研究の目的は、19世紀前半に活動した女性作曲家ファニー・メンデルスゾーンとクララ・シューマンのリート作品について、彼女らの作品に対する意図やこだわりを読み解き、現代に通じる歌唱表現を探求することである。当時の社会背景において、二人の異なる家庭環境、音楽環境をふまえ、彼女らの熱い創作・作曲意欲をどのように心を秘めながら生きぬいたのか、その「葛藤」を様々な角度から研究している。

第1章ではファニーの音楽活動とリート作品について、第2章ではクララの音楽活動とリート作品について述べられ、第3章では二人の充実期の作品である、ファニーの〈6つの歌曲 作品10〉から、クララの〈ヘルマン・ロレット『ユクンデ』からの歌曲集 作品23〉から歌曲を選び、特色を①ことばと旋律②テンポ③ブレス④強弱に分類して比較している。テンポに関して3つの音源により比較されるが、申請者による実験的な歌唱表現などが含まれていれば、歌唱分析としてさらに奥行きが生まれたであろう。ブレスに関しては、楽譜にだけ集中するのではなく、詩そのものを深く朗読するところから、自然に見つけることの出来るブレスがあることを気づいてほしい。休符とされている「間」は、どこから生まれ、なぜこう書き残されたのか、何を意味しているのかを、これからの研究に続けてほしい。

演奏審査会では、上記の2作品の他に、ファニー充実期の作品である『ファウスト 第2部』からの情景》が女声合唱を伴い演奏された。アルマ・マーラー《5つの歌曲》、クララの歌曲 作品13-1、13-3、13-4の3曲を含み、全20曲が情熱を持って丁寧に歌われ充実した内容のプログラムと演奏であった。申請者の音楽に対する真摯な取り組みと、長年の地道な努力の成果として評価したい。

以上のことから、課程博士学位取得にふさわしいと判断され、合格とした。